
探偵オペラ ミルキィホームズ 記憶を失った少年

Teann

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵オペラ ミルキイホームズ 記憶を失った少年

【Nコード】

N7438P

【作者名】

Teann

【あらすじ】

僕は記憶を失っていた。ここはどこ、僕は誰…そんな中、僕は四人の少女に出会った。その少女と話すことで…僕は変わっていった。僕と言う存在を見つけることが出来た。これは記憶を失った少年が四人の少女探偵と過ごしていく物語…

第一話 始まり…（前書き）

処女作です。話し方など違うところがあるかもしれませんがよろしくお願ひします。

アドバイスなどもよろしくお願ひします。

第一話 始まり…

「…どこ、どこ？」

僕が最初に発した言葉はそうだった、いや、僕ではなく私かもしれない。僕は記憶を失っていた。今は何年か、名前、誕生日、そうあらゆることを、だが男についているものがあつたので男であつている。あとは…

「声、出る」

声は出る。だけど途切れ途切れ、他に覚えていること…生活に必要な記憶、体の動かし方 いや、体が覚えているだけかもしれない。服は白いボロ布。ボロい靴。持ち物なし。場所は？そして立ち上がり周りを見渡すそこは…森の中だった。緑色の森、見えるのはそれだけ、他には何もない。何故こんなところに居るんだ？

「…歩く」

歩くしかないと思い、一步一步、歩き出していく、そして何分経つたであろうか。僕は小川に出ていた。ここをたどれば何処かに出られるはず。

だが…

「休憩、大事」

休憩も大事なことに気がつき、少し小川の近くの切り株に座って休憩する。流石に精神的な疲れもある、体力も少ない。僕は小川に脚をつけて綺麗にする。そして小川の表面に移る僕の顔を見ることが

出来た。真つ黒な腰まで伸びた髪、漆黒の目、そして顔のパーツが整った顔。これが僕か

「…歩く」

そして再び歩き始める、今度は小川に沿って、そして何分いや何時間経ったであろうか、ようやく森から抜け出すことが出来た。大きな湖があった。湖の中央には建造物が立っている。建造物があるということは近くに人が居る。そして辺りを見渡すと、古ぼけた屋敷を見つける、そして小さな声が聞こえる。人が居る。

「行って、話し」

行って話をしよう。僕はそう思い歩き始めようとするが、身体的にも精神的にも疲れていたらしく転んでしまった。しかし諦めずに這い蹲りながら進んでいく。しかし古ぼけた屋敷につく頃には這い蹲る体力も残されていないかった。

「（声、出ない、もう、無理）」

せめて屋敷の仲の住人に気がつかせれば良いのだけれど、そんな体力も残されていない。しかしどうも奇跡が起きたらしく人が階段を下りる音が聞こえてくる。

「（よかった、助かる）」

そして屋敷の扉が解き放たれてきたのは…桃色の髪の毛で頭の上に大きなリボンをつけた少女だった。そして少女は僕の姿を見るなり驚きながらも駆け寄ってくる。

「　　ですか!？」

「（たす…かった…）」

そして僕は疲労のために深い眠りにつくのであった。そしてこれが物語の始まり。

目を開けると木造の天井だった。そして近くからは声が聞こえる…
四人居るのかな？

「この人誰かな？」

「さあ？目が覚めてから聞けば？」

「怖い人だったら…どうしよう」

「その時は私達のトイズを使って」

「そのトイズは失われてるんだけど？」

「そ、そうでしたね」

僕は周りの暗さからして夜だと判断する。そしてゆっくりと起き上がり始めて人と会うのだった。

「…此処、何処？」

「!？」

驚かせたかな？でも今は状況を確認しないといけない。すると四人の中の一人…黄色の髪の毛で、花柄のヘアピン(?)を沢山つけた女の子が近寄ってくる。警戒心が沢山…当たり前か。

「…私の名前は、コーディリア・グラウカと言います。あなたは？」

「…分からない。記憶、無い」

「っ!?!? 記憶喪失!?!」

「ごめん、名前、分からない」

「い、いえ…気にしないでください」

?、誰かがこの話を聞いているような気がする。何だろう? 扉の向こう?

「そこ、人、居る」

「え!?!」

すると赤茶色の髪の毛の女の子が扉をキックして扉をぶち破る。大

胆。すると扉の向こうに誰か居たらしく悲鳴が響き渡った。

「いってえ〜、何しやがる!」

「お前が盗み聞きしてるからだろう!」

「けっ!」

男の子?長い髪を首の所で結んだ男…なんか…おちやめそう。

「で?こいつ誰?」

…言いくいことをはっきり言いますね?

「お、お前なあ!言葉を少し考えろ!盗み聞きしてたんだろっ!」

「してねえよ!しようとしただけだ!」

「同じことだ!」

赤茶色の髪の毛の女の子と、長い髪の男の子が喧嘩を始める。傍から見ていると仲がいいように見えるけど?

「仲良くない!」

なんで心の言葉が分かったんでしょうね?この人たち全員そうだったら恐ろしい。

「とりあえず、あれはほっといて、どうしましょう?」

「名前、みんな、聞いてない」

「あ！そうでした！皆！」

そして喧嘩をしていた二人も喧嘩を止めてこちらを見る。なんだか恥ずかしいな。

「じゃあ改めて、コーデリア・グラウカよ」

「コーデリア…、覚えた」

「僕はネロ、譲崎 ゆずりざき ネロ、よろしく」

「ネロ…よろしく」

「えっと…その、エルキュール・バートンです…」

この子は始めて話す。紫色の髪の毛を背中まで伸ばしている女の子。恥ずかしいのか緊張しているのか、なんかオドオドしている。

「エルキュール…」

「あ、エリーでいいです」

「エリー…よろしく、エリー」

「は、はい」

「最後は私です！シャーロック・シェリンフォードです！シャロって呼んでください」

あれ？この子は何処かで…助けてもらったときの子だ。感謝しないと…。

「よろしく、シャロ。助けて、ありがとう」

通じたかな？どうもこの言葉はめんどくさいな。思考は普通に稼働するんだけど…？

「えっと、どういたしましたして」

よかった通じた。でもこの言葉は出来るだけ直さないと…はあ、そしてその事をネロが聞いてくる。

「なあなあ、その言葉遣いってわざと？」

「違う、勝手、なる」

「ふうん、大変なんだな」

まあね。そういえば男のこの方は聞いていないけど？僕が男のこの方を向く。

「俺も？」

「そう」

「しかたねえな…、根津 次郎だ」

次郎？口元がおかしい、この名前に言いなれていない、もしくは偽

名？いや前者かな？

「…そう」

でも今は言うべきじゃない。言えない秘密でもあるのだろうか？僕
そういえばこの場所とか歴史を知らないや

「シャロ、場所、どこ？」

「あ、はい。此処はホームズ探偵学院です」

探偵？この子達が？…どうしても想像できない。

「失礼だな、これでも有名な探偵なんだぞ」

ネロ、お前真面目に心を読む力があるのか？なんで僕の考えがお見
通しなんだ？誰か教えてくれ。

「そうです！私たちはミルキイホームズと言うチームなんです！」

シャロが嬉しそうに話す。ミルキイホームズ、こういうのは次郎に
聞こう。なんか軽くにやけてるし。

「次郎、説明」

「…はあ…いいか？ミルキイホームズとは…」

ミルキイホームズ：小林オペラにより構成された探偵チーム。その
活躍は目覚しく、怪盗アルサーヌを幾度と無く追い詰めた探偵チ
ーム。但し今は休業中？

「休業？」

「…実はトイズを失ってしまってます」

トイズ：シャロの話によると、一部の人々が持つ特殊な超能力。多種多様、トイズを持たないと探偵として活躍できない。

「その…それで休業と言う訳ではないのですけれど…捜査活動は禁止されているんです…」

エリー…悲しそう。だけどトイズか…僕にもあるのかな？うーん、エリーの場合、身体強化。コーディリアは五感強化、ネロは電子機器のダイレクトハック、シャロはサイコキネシス…僕にもあるのかな？試しに…次郎相手にやってみよう。

「はあ！？なんで俺が」

「実験、我慢」

うーん、こうか？僕が意識すると…何処かの風景が映し出される。雪山？なんだこれ？そしてその風景に次郎が写りだされる。意味分からん、僕が目を開けると…次郎が消えていた。

「??？」

「き、消えたあああ！？」

「ど、何処に？」

「凄いです!」

「て、テレポート?」

そうか…うん、次郎を戻してみるか。そして今度は部屋の風景、そして次郎の姿を思い浮かべて目を開けてみると。

「…(ガタガタガタガタ)」

寒そうにしている次郎が居ました。ん…さっきの風景が雪山だったから雪山に行ったのか。便利だけど…なんか体力の消耗が激しい。すごいダルイ。シャロは目を輝かせてこっちを見ている。

「何処か、行く?」

「うん!」

え〜と…何処がいいだろう?あれ?雪山と森しか風景が出ない…。一度見たことがある場所じゃないと駄目?そして森の中にシャロを送る。っ、体力の消耗が激しすぎる。とりあえず僕のトイズをまとめて見よう。

テレポート：一度見た場所(絵でも良い、雪山は森の中から山頂を見たため)にしか送れない、最大人数は僕を合わせて5人、更には一日に5回しか使えない(これ以上使おうとすると意識を失いそうになる)

相手を戻す時は相手の姿を想像する。ちなみに移動距離に制限は無い…と思う。10?先には送れた。

「…多様、無理」

「そうね、せめて4回にとどめましょう」

「それ以上は…危ないよ？」

「（ガチガチガチガチ）」

「お〜い、冷静に分析してないでこっち手伝って〜」

…次郎、ごめん。正直すまないと思っている。僕も移動しよ。そうして今度は僕が森の中に行く風景を想像する。するといつの間にか森の中に居る。不思議だ…あと1回しか使えない。戻るときだけだな。

シャロは…？

「くう…」

あ、木の陰で寝ていた。かわいい寝顔だね。…そういえば名前無いや。後で考えてもらおう。シャロどうしよう？起こすのもかわいそうだし、もう少しこのままにしておこう。

「…僕は何者なんだろう？」

自分は何者？正義・悪、白・黒、僕はどっちの人間？…これ以上考えるのはよそう。僕のシャロの隣に座って頭を冷やすことも考えながら眠りに落ちるのだった。

第一話 始まり…（後書き）

感想をよろしくお願いします！

第二話 「事件発生」

「…?」

ああ、そうか寝ていたんだったな。隣にはまだシャロが寝ている、涎垂れてるけど…。肌寒いと思ったら服装ボロボロのままだったな。いきなりレポートしたから当たり前か。そろそろ帰らないと…。

「シャロ、起きる」

「むにゃ…もう食べられない」

「…シャロ」

「ん〜?あ、こんにちは?」

「…早く、行く」

「え、あ!そうですね」

シャロはそういつて立ち上がり砂を払う、あとは帰るだけかな?ふう、結構寝ていたみたいだな。

「シャロ、帰る」

「はい!よろしく願いします!」

そういつて意識を集中させる。風景を思い浮かべ、僕とシャロがネ口達の元に戻っている。そう考えるといつの間にか最初の場所に戻

つてきていた。でもそこにネロ達は居ない、何処に？

「あれ？やけに学院のほう騒がしいです」

「…？」

なんだろうな、シャロは扉を開けて向かったので僕もついていくことに、そして何分か走ると学院に到着する。シャロはみんなを探しに行った。それより服がほしい…あ、次郎発見。

「次郎」

「ん？おお、名無しか」

…それ名前？まあ今は置いて

「服、貸して」

「…服なんて予備の制服しかないぞ？」

「いい」

「はあ、仕方ねえ」

そういつて次郎は急いで自分の部屋に戻っていくのだった。そして10分後、僕は制服に着替えて、次郎に話を聞く。

「…盗難事件？」

「おう、盗まれたのは女の子の下着だ」

それ…盗んだ人変態だな？ちなみに盗まれた女子生徒は？

「一年生の女子だ」

「…状況は？」

「確か、部屋の中を物色され、下着を盗まれたんだ」

下着が盗難、シャ口達も捜査しているはず。僕も手伝う。

「次郎、手伝う」

「はあ！？捜査するのか！？」

「そう、容疑者、何人？」

「…まあ楽しそうだから手伝ってやるか、確か容疑者は三人」

男A：山登りが好きな男子、トイズは気配遮断

男B：少し変態な男、トイズはピッキング

男C：冷静沈着な男、事件現場の近くに居たためつかまった。トイズは擬態

「男C、擬態？」

「ああ、生物になり済ませることが出来るんだ、小さすぎるのは無理だけどな」

…事件現場に行ってみよう。僕は次郎を連れて事件現場…女の子の

下着が盗まれた部屋に行く。部屋に着くと女子生徒は泣いていたが部屋には入れてくれた。部屋の中は散らばっていた。下着は3着も盗まれた。犯人の進入方法は…窓ガラスが割れているため窓ガラスからだと思う。でも窓ガラスをわざと割ったフェイント？

「？」

だが窓ガラスの割れている部分の近くを触ると、少し粘着力…ガムテープの残っていた、やはり犯人はガラスを割って入ってきた。しかもガムテープを使ってガラスの割れる音が聞こえないようにしている。

「（…凄い知識）」

「名無し、なんか見つかったか？」

「（窓ガラスを割って入ってきた…でも此処は三階、屋上から来たのか？）」

「おい」

「…次郎、屋上」

「ん？わかった」

そして屋上に向かっていく途中でシャ口達四人組と、一人の女子生徒に出会う。なんの話？

「おい、何の話だ？」

「実はこの女子生徒が変な音を聞いたと言っているんです！」

シャロ元気だね。だけど変な音？僕は女子生徒の話聞くことに…。

「はい、何かが擦れる音です…」

「…犯人、分かった、次郎、確認」

「屋上か？」

「そう」

シャロ達はいまだに頭を悩ませていた。これで屋上にある物があれば…そして屋上に到着して詳しく探していると

「…見つけた」

塗装がはげた屋根があった。これで確定、犯人分かった。

「次郎、分かった」

「マジか！？でもどうやって発表するんだ？」

「…シャロ達、一緒に」

「…手柄はミルクィホームズにつてわけか」

「そう、手柄、いらぬ、シャロ達、元気、それでいい」

「…分かった」

僕は紙に事件の内容を書いてシャロ達に渡す。そしてシャロ達はみんなを集めて事件の内容を話す。

「…私たちは犯人が分かりました」

その瞬間周囲の生徒から歓声上がる。そんな中一人の女子生徒が前に出てくる。

「本当ですか？」

「はい！見ていてください、生徒会長」

生徒会長…か…。そしてシャロ達が話を始める。さてと探偵の出演だ。

「女子生徒の部屋は三階、出入り口は窓か扉しかありません」

「その中で窓ガラスだけ割られていた」

そこで生徒会長が話に入る。

「しかし窓ガラスの割れた音は聞こえませんでした」

「えっと…ガムテープを使っただけです」

『ガムテープ？』

「あつ…」

「はい、ガムテープを窓に張って音が鳴るのを防止したんです。」
「コーデリアがエリーをサポート、いいチームだね。そして話は続けられる。」

「だけど私たちは窓ガラスがフェイントかもしれないと考え、捜査を続けました」

「そんな中、僕達は女子生徒からある話を聞けたんだ」

今のところは問題なし…。

「話とは？」

「えっと…何か擦れる音です」

「そして擦れる音の正体は…ロープです！」

そう、犯人はロープを使って被害者の部屋に進入したんだ。おかげで屋上の屋根にはロープの擦れたあとがあった。

「でもロープなんか持っている生徒なんて居ますか？」

「居ます！そう…山登りが好きな貴方なら持っている筈です！」

「っ！」

そしてシャロは一人の男を示す…そう男Aだ。

「な、何の冗談だ、大体！ロープを使って降りていたら擦れる音以

外に音も聞こえるだろう！」

「そうかな？山登りが好きな君であれば危険な山道、慎重に降りる技術もあるよね」

「えっと…あと貴方のトイズを使えば」

「気配だって遮断できますもの！」

終わったかな？そこで次郎が現れてとどめの言葉を言い渡す。

「生徒会長、男の部屋に入ればロープと下着…あるんじゃないか？」

「…そうですね、此処まで証拠があるのであれば…貴方の部屋を捜査させてもらいます」

「…勝手にしろ」

そして数分後、男の部屋からはロープと女子生徒の下着が見つかった。これで終わりかな…？

「あれ？男の人が居ません！」

「…え！？」

シャロは気がついたか、さてと此処まで完全に気配を消されてはどしようもない、だけど犯人の居る場所に行くことは出来る。そして僕はレポートする、そう男の下に。そしてレポートが終わると男が目の前に立っている。

「な、何だお前!？」

「…ごめん」

「なに」

そして僕は男のみぞおちを殴り気絶させる。これで終わり。さてとシャロ達に渡すかね。そうして僕は男を方に担いで、シャロ達の下に向かうのだった。建物の影から一人の男がのぞいているのが分らずに。

そして事件は解決。男Aは退学処分、シャロ達は少し評価が上がった。ちなみに僕は出来るだけ隠れて生活している。見つかると面倒。そんな中四人がやってくる。ちなみに僕はシャロ達の部屋で生活中。

「カイトさ〜ん」

「何してるんだよ〜」

「さ、探しました〜」

「早く部屋に戻るわよ!〜」

ちなみに名前も決まった。カイトっと言う名前、意味は…聞いていない、名前なんていらぬ、もし記憶が戻り、僕がシャロ達に害をなすものであれば僕はシャロ達の目の前から姿を消す、そして再び

名無しに戻るだけだ。だけど…今は、この生活を楽しまう。

「…(そう、この生活…楽しまう)」

「(初めて笑いました!)」

「(へえ、笑う顔始めてみた)」

「(き、きれいだな)」

「(うっ…かつこいい)」

四人組はこんなことを思っていましたとき。

「あの男は何者」

「分かりません、記憶を失っていることぐらいしか」

「あと最近はずむズの連中にカイトって言うわれてるぜ」

「まあ、様にかかればあの男が関わっても問題ありません!」

「面白くなりそうね」

月明かりの下四人の人影がヨコハマのビル街を見下ろすのだった。

第二話 「事件発生」(後書き)

感想、評価、待ってます！アドバイスもよろしくお願いします！

第三話 試験

「……あわわ……」

なんで目の前に生徒会長？しかも何かを見透かしているような目で。そしてなんでシャロ達がおろおろしてるんだ？もう意味が分かりません。とりあえず状況を説明しようか。

あれは今から1時間前…。

僕がシャロ達と隠れながら生活すること2週間、シャロ達との仲も良くなってきた。シャロ達は前回の事件を解決したおかげでまともな食事が取れるようになった、そのおかげで最近元気一杯です。ちなみに今はお昼時。僕は近くの森の木に寄りかかっている、動物が沢山集まるけど、害でもないので放置。でも右腕に小鳥が6羽ぐらい止まって腕が重い。最近ではシャロ達と一緒に昼ご飯を食べている。今日も来るのかな？

「お〜い、カイト〜」

ネロか。僕は立ち上がり手を挙げる。ネロは右手にバスケットを持っていた。シャロ達が居ない？

「生徒会長に呼び出されたんだよ」

そんな僕の心の問いに答えながら、バスケットの中のサンドイッチ

を僕に渡してくる。しつこい様だけどもなんで心の声がわかるんですか？

「顔に出てるもん」

「…そう」

無表情なんだけど…？そして僕はサンドイッチを口の中に入れる。美味しい。

「ネロ、作った？」

「そ、そうだけど…美味しくなかった？」

「（ふるふる）逆」

美味しいです。まあネロ作れるのは意外だったけど、しかし美味しいな。女の子はみんな料理がうまいのかな？そしてネロと話しながら食べていると遠くからある人物がやってくる。

「始めまして、カイトさん」

「せ、生徒会長！？」

…あ、嫌な予感。そして後ろから走ってくるシャロ、コーデリア、エリーの三人組。ばれたのか、僕の存在。

「単刀直入に言います。この学園から出て行ってください」

で、最初に戻ると。うん、とりあえず質問。

「シャロ達、どうなる?」

「まあ、前の生活に戻るでしょうね。貴方と言う存在を隠していたのですから」

ほう?それは…おかしいね。

「…貴方、隠し事、ある」

「っ!何をですか?」

「…言つて、良いの?」

そして二人の間で気まずい空気が流れる。悪いけどまだ僕は…シャロ達と過ごしたいんでね、まだ学園を出るわけには行かない。

「分かりました、そこまで言つなら…貴方には入学試験を受けてもらいます」

入学試験?つまり学園の生徒になれるって言うわけね。なるほどね…いい案だ。

「但し、落ちた場合はこの学園から出て行ってもらいます。いいですね」

「…分かった」

「試験は二日後です。試験内容は、トイズによる試験ですので、で

は
「

そういつて立ち去っていく生徒会長。

「カイトさん、生徒会長に隠し事があるって言ってたけど。本当？」

エリー、よくその言葉見逃さなかったね。

「違う、カマ」

まあどうもあの様子だと本当に何か隠しているみたいだな。ふう、
とりあえず試験を何とかするか。まあシャロ達四人組が居るから安
心？かな？

「皆、試験、手伝って」

「「「「もちろん！」「」「」」

さてと…最初に教えてもらうのは、シャロかな？

「はい！試験と言ってもトイズをうまく扱う試験だけです。その場
で自分のトイズを披露するだけです」

その場でねえ…あ、いい事思いついた。これは生徒会長驚かせられ
るかも…。

「とりあえず、お菓子食べて糖分取る」

「…ありがとう」

ネロがくれたお菓子を食べる。甘い、まあ試験は大丈夫かな？

「えっと…でも油断大敵です」

「そうだね」

まあ注意はしておくかな。

「試験日まであと二日。頑張りましょう」

「うん、シャロ達、大好き、だから、悲しませない、頑張る」

さてと試験の準備でもしますかね。あれ…なんでシャロ達固まっているの？何かあったのか？

「…?」

「「「「（好きって言うわれた…／＼／＼）」」」」

?、よく分からないけど。まあ大丈夫だろう。それより助っ人として次郎でも呼ぶかね。

そして試験日、僕は大広場に立っていて、周りには多数の生徒の数。シャロ達も制服を着て見ている。さてと、この作戦はシャロ達にも言っていないからな、どういう反応するかな。とりあえず生徒会長

の反応をみましょうかね。

「それではカイトさん、試験を開始してください。自分のトイズを使った特技をお願いします」

「…分かった、次郎」

「はいよ」

そして次郎が持ってきたのは、大きな木の棺、何するか分かったかどうか？

「僕、中、入る、次郎、棺、燃やす、そこから、出る」

「!?!」

生徒の大半が驚いていますね。まあ失敗したら死ぬからね。そして僕は木の棺に入り、次郎はそれを燃やし始める。

「か、カイトさん!?!」

この声…シャロか？まあシャロは僕のトイズ知ってる筈だけど…なんで心配そうなの？

「おい次郎!?!どういう事だ!?!」

「カイトからの頼みだぜ」

うん、まあただ火をつける人がほしかっただけなんだ。っ！そろそろ火が近づいてきたな、抜け出すか。そして僕はレポートを使用

して学園の屋上に移動する。大広場では棺が燃え盛っていた。さてと…そして僕はトイズで生徒会長の後ろにレポートして…

「わっ」

「きゃうー!？」

「…(ここにここ)」

「…え?あれ?ええ!？」

うん、驚かすの成功。しかも面白い声まで聞きました。そしてシャ口達が近寄ってきて、僕が挨拶しようとした瞬間、四人から一斉にハリセンで叩かれました。しかも皆さん鬼の形相です。

「痛い」

「心配掛けさせないでください!」

「僕達がどれほど心配したと思ってる!」

「そうです、あんな事普通思いつきませんよ!」

「今後、一切やらないでください!」

「「「「いいですね(いいね)「「「「

「…はい。」

怖いよ。ものすごく怖いです。そして生徒会長は一つ咳をすると話

し始める。

「試験は合格です…が、今後危険行為をした場合、退学になるかもしれないので、気をつけてください」

「はい」

「それでは、試験を終了します」

そして僕は学院の正式な生徒になるのだった。ちなみにシャロ達には料理を作って機嫌を直してもらいました。本で読んだとおり作っただけだけどね？さてと明後日から正式な生徒。頑張らないとね。

「それで、カイトのトイズは何ですか？」

「どうもテレポーターらしいです」

「まあ、あんな大技繰り出したしな」

「それより、アルサー又様のあの悲鳴…」

「言っわないで…私も分かってるから」

そんな事がヨコハマのビルにて話しわれていた。

「…ネロ？」

「カイト…何してるの？」

「…月、見てた」

今の時間帯は午後11時、僕は外に出て月を見ていた。綺麗だな。そしてネロが隣に来て座る。

「なあ、カイトは記憶が戻っても僕達のもとに居るんだよな」

「…分からない、まだ、分からない」

「…そうか」

「…そう」

「…」

「…」

「なあカイト…今度の休み、皆で出かけないか？」

「…何処？」

「街にだよ、僕達が案内するからさ」

「…分かった。楽しみ」

「うん、カイトはまだおきてるか？」

「うん、もう、少し」

「じゃあ、僕はこれで、お休み」

「…お休み、ネロ、良い夢を」

そしてネロは戻っていく。僕は何者？それを月は知っているかもしれない…。

「…カイト」

そんな様子を木の陰からエリーが見ていた。いや、皆見ていた。

「…カイト」

コーデリアは建物の影から。そしてシャロは…

「…また、明日…おやすみなさい」

窓から様子を見ているのだった。それぞれの思いを胸にこめて…。

第三話 試験（後書き）

感想、評価、アドバイス、待っています。ネロの言葉がよく分からない。

第四話 怪盗

「新しくホームズ探偵学院に入ったカイト君よ、ほら挨拶」

「…よろしく」

まさか学院に入ることになるうとは。ちなみにシャロ達とはクラスが違う。まあ悔しがっていたけど。そして現在僕は学院での生活が始まろうとしている。

しかし、なんで女子が目を輝かせているのかな？…まあ気にしたら駄目だな、とりあえず僕は先生に指定された席に座り、授業を受けるのであった。そして重大な事実に向面する。そう…

「（字が…書けない。）」

読むだけなら支障はないが、書けない。これは困った。時間を掛ければ書けるけど、その間に授業が進んでしまう。そしてそんな事を知らない先生は授業を進めるのだった。

一時間目 プロファイリング (Offender profiler
programmer)

犯罪捜査において、犯罪の性質や特徴から、行動科学的に分析し、犯人の特徴を推論すること。困った。字が書けない為授業が追いつかない。僕は少しずつ書いてなんとか終わらせる。

「（しんどい…）」

そして次の授業は…？

二時間目 尾行

相手に見つからなければ問題ないのだろう？そしてシャロはなんでピコピコハンマーで相手を叩いた。これが尾行なの？そして尾行を始める前に先生からきちんとピコピコハンマーを渡された。

「（え？これ普通だったのか）」

そして尾行が開始される。ちなみにトイズは使用禁止。僕は長い髪の毛を後ろにまとめて尾行を開始する。建物の影に隠れながら移動する。時にはゴミ箱の中に、時にはマンホールの中に…そして尾行している犯人が隙を見せている間に、僕はピコピコハンマーで犯人を叩くのだった。

三時間目 人間観察

これは、相手の特徴を捉える為の授業である。現在僕のモデルになっている人は、二十里^{にじゅうり}海^{かい}先生である。

「さあ！私の体を観察しなさい！」

ただの変体？いえ先生です。と言うか服を脱がないでください。そして仕舞には僕に近づいて来たので、殴って窓から落ちてしまいました。

「（…悪くないよね？）」

四時間目

僕は図書室で勉強していた。授業は…字が書けない為時間がかかる。だからこそ図書室で勉強している。まさか英語が書けないとは。泣きたい。今は字を覚えることに専念しないと。そして図書室に誰かが入ってくる。

「…僕、手伝い、生徒会長、言う」

そして僕とエリーは生徒会長に事情を説明して、なんとかエリーはお咎めなしと言う事になった。僕のせいでエリーが大変なことになるところだった。そしてシャロ達の部屋に戻ると、シャロ達居なかった…シャロ達何処？

「えっと…何処でしょう？」

「…？」

そして置手紙が置いてあることに気がつく。そして手にとって読もうにも…読めない。

「エリー、読んで」

「え？あ、はい。事件が起きたため事件現場に行きます。」

え、置いていかれた。そしてエリーはあわてた顔になり始める。

「ど、どうしよう！急いでいかないと！」

「…僕、行く」

そして僕はエリーの手を掴んでシャロ達の下にレポートするのだ。そしてレポートしてみると…シャロ達がカラフルな石の祭壇？に乗って意味不明なことをしていた。此処…博物館かな？…え？…どういふ状況？

「あ、あんだ何者よ！」

「？」

そして後ろを振り向く、誰も居ない…あれ？

「下よ下」

「…お」

「なにその純粹に驚いた顔!？」

金髪の髪の毛をした小さな子が騒いでいた。子供？僕はなでなでする。

「ちょ、やめなさい！私を誰だと思っているのよ!」

「…子供？」

「子供いつな!」

「か、カイトさ〜ん、その子はG4の人ですよ」

だからシャロ、なんで祭壇の上で意味不明なことをしている？そしてエリーいつの間に加わった？

「そう！私こそIQ180の天才！明智小衣よ!」

「…「こころちゃん?」」

「「こころちゃんいつなああ!」」

小さい。そして周りを見渡すと他にも三人の女性が居ることに気がつく。女性率多いね。

「始めまして、長谷川 平乃と申します」

なんでラクロススティックを持っているんだろう…？

「あたいは、銭形 次子だ、よろしくな」

すごい江戸っ子気質だ。こころちゃんよりリーダーに向いてそうだが？

「遠山 咲…よろしく」

パソコンと口にキャンディを持っている。そして耳にはヘッドホン。

「カイト、よろしく」

「…」

あ、遠山さんとは気が合いそう。無口的な意味で。それでシャロなにしてるの？

「そして右足を青！」

「…」
「ひいひいひい！？」
「…」

「あれ、何？」

「小衣の仕返しです」

「……ころちゃん、駄目、シャロ達、いじめるの」

「……ころちゃん言うなあああ！なんであなたに命令されなくちゃいけないのよー！」

「……駄目、今すぐ、やめろ」

「嫌よー！」

「……そう、じゃあね」

そして僕は小衣をテレポートさせる、え？雪山にですが？そして数十秒後。

「（ガタガタガタガタ）」

「おーよしよし、寒かったな」

「シャロ、その行為、うそ」

「……え……！？」「……」

気がついてなかったの！？そしてそんな漫才をやっていると警察に配備が徐々に進んでいく。事件内容を聞くと怪盗アルサー又が国宝「花のビーナス」を盗む犯行予告をしたため警備が厳重。…なるほどね。それでシャロ達は独断で来た訳か。

「……（大体、トイズを使う連中に警備なんて意味が無いな）」

そして唐突に全ての証明が切れて、辺りは一面に暗くなる。…電力源をやられた？

「いやあああああ！？」

「！？」

びっくりした。そういえばコーデリア暗い所苦手なんだっけ？はあ…そしてG4の皆さんは戦闘に構える。ん…？花のビーナスが消えていく…皆には見えていないのか？いや、突然暗くなって目が慣れないのか。そして月明かりに照らされた瞬間。

「あー！花のビーナスが！」

シャロが叫んで一斉に皆が気がつく。そしてなんだか騒いでいるが僕は花のビーナスがあった場所から目を離さない。さてと…どう動く？

「居ました！南口に逃走しています！」

「…(にやり)」

見つけた。あいつが怪盗一人目だ。僕は近くに居た遠山さんにごっそりと告げ口をする。だって触れば分かるもん。

「(花のビーナス、此処、ある)」

「…(…本当だ。つまり)」

そして遠山さんも気がついたようで先ほどの警察官に目を向ける。

「（何か無いかな…？）」

僕はポケットの中からシャープペンシルを一本取り出す。勉強したままの状態だから入っていた。それを警察官に向かって投擲！

「痛ああああい！」

そして警察官の変装が解け、姿が現れる。そして僕はトイズを使ってテレポートして変装していた男の目の前にテレポートすると男の頭部を蹴り飛ばす。運動神経はいいんですよ。そしてその騒ぎに気づいたほかの三人も現れる。一人は露出度の高い服を着た女性。もう一人は日本刀を持った男、もう一人は帽子をかぶりにやけている男。

「お見事ですね、カイト」

「…アルサー又？」

「ええ、私が怪盗アルサー又です、今回は私達の負けです。貴方達後は頼みます」

「お任せください。はあああああ！」

そして日本刀を持った男が此方に突っ込んで来る。僕は何とか回避していくもののさすがに分が悪い。っ！僕は油断して肩を軽く切っってしまう。そこから少し血がにじみ出る。そして再び日本刀を振り上げてくる。

「もらったぞ！」

「…ちっ」

僕は回避できないと諦めたが。横から大きな石版が飛んでくる。その石版は狙い違わずに日本刀を持った男に当たり、壁を突き破って外に出るのだった。そして石版が見たほうを見ると…。

「はあ…はあ…」

エリーが肩で息をしていた。え？エリー投げたの？そしてもう一人の仲間はいつの間にかいなくなっていた。とりあえず肩が痛いですがしかし…アルサーヌ…どこかで…？

「だ、大丈夫ですか！？」

エリーが近寄ってきて、僕の方の様子を見る。そこまで深い傷じゃないから大丈夫だよ。それより…

「今の？」

「えっと…私のトイズです。」

え？失ったんじゃないの？ほらシャロ達も啞然として、更にはG4の皆さんも啞然としてるよ。

「あつ…」

そしてこの事件は幕を閉じた。ちなみに遠山さんからは最後に…。

「仲間」

「仲間？」

「そう…なう」

と言われて、連絡先を教えてくださいました。無口仲間？その事がばれて何故かシャロ達に怒られたけど。何で？そして肩は一週間で直るらしいです。軽くシャロ達が涙目でした。そしてミルクイーホームズは再びお手柄で、普通の学院生活が送れるまで回復した。

「まさか…盗むのに失敗するとは」

「あのカイトとか言う男、なかなか強いです」

「僕の変装を見破るなんて、ありえない」

「次は如何します？」

「そうね…カイトを何とかしなければね」

キャラ紹介

カイト 年齢不明

身長 180cm 体重50キロ

トイズ テレポート

好きなもの ミルキーホームズの皆、仲間
嫌いなもの 字の書き

詳細

運動神経はよく、推理も得意。一応なんでも出来るようだが、字の書きが苦手。何故記憶を失っているかは不明。色々な武器を扱えるが、何故扱えるかも不明。言語がおかしいのは不明。

第四話 怪盗（後書き）

感想、アドバイス待ってます。誤字があったら報告してください。

第五話 ヨコハマ大樹海（前書き）

あけましておめでと〜っ〜いませ〜！
くれからもがんばっていきます
！

第五話 ヨコハマ大樹海

「こころちゃんがんばれえ」

「こころちゃん言うなあああ！」

僕とシャロ達4人は博物館にて、こころちゃんに罰を与えています。前回嘘つかれた事をシャロ達が根に持っているんです。しかもこころちゃん顔面に殴られた後ある。

「（シャロ達怒らせないようにしよう。そういえば…）」

最近徐々にトイズが強くなっている気がする。なんでだろう。大体トイズは一体なんなんだ？超能力？トイズとは一体…？そして考え事をしていると遠山さんがやってきた。

「そんなことしている場合じゃない。事件」

「……………え？……………」

「ヨコハマ大樹海で行方不明者」

話によると行方不明者の名はアイリーン・ドアラ小学二年生。昨日から行方不明…ヨコハマ大樹海？

「ヨコハマ大樹海…！？あそこは地形が入り組んでいる上に…（省略）」

ふむ、凄いとこに迷い込んだな。じゃあ行くとしますかね。僕は

シャロ達を集めて一斉にヨコハマ大樹海にテレポートする。ちなみに直ぐ博物館に戻ってみる。あ、こころちゃん以外全員居た。送っていくか。でも…

「…こころちゃん、いいの？」

「「「（くく）」」」

「待ちなさいよ!？」

そして僕とG4のメンツもテレポートするのだった。

そしてヨコハマ大樹海前、作戦本部。さすが警察沢山。アイリーンちゃんの父親もいたが、こころちゃんが殴って気絶させていた。そして僕とシャロ達4人も搜索を開始する。ちなみに警察から許可をいただきました。

「いない」

「こつちも」

「こつちもだよ」

「…居ません」

「居ませんね」

…困った。テレポート使って移動も出来ないし、テレポートも実際に会ったことのある人の所しかテレポートできない。

「なあコーデリア、お前のトイズを使って探せないのか？」

「！…！…やってみます」

そしてコーデリアは集中し始める。どうなるかな…あれ？熊居るよね？皆気がついてないの？そして僕は熊の近くに居たコーデリア、シャロの手を引っ張る。

「後ろ」

「カイト？そんな急いでどうした」

ちなみにエリーも既に走り出している。そしてネロも直ぐに走り出す。あ、追いつかれる。そして熊が手を振り上げてくる。後ろは崖、逃げ道なし。

「…シャロ、危ない」

「え？」

そしてシャロを突き飛ばし…僕は熊に殴られて崖から落ちる、…もう終わりかな。そして僕は崖から落ちていく風景を遅く感じながら頭に強い衝撃が走り、意識を失った。

そして目が覚めると、洞窟に居た。そして頭には服の切れ端が巻いてあり、血を止血してある。そして右腕は打撲しているのか動かすと痛い。

「（……声？）」

そして洞窟の違う場所から声が聞こえる。僕が歩いていくと、焚き火を囲むようにシャロとこころちゃん、それに行方不明の子供を…アイリーンちゃんを見つめる。しかし視界がかすむ。

「（……まだ本調子じゃないか…はあ）」

そして僕はシャロに話しかける。

「シャロ」

「あ…カイトさん…」

そして悲しそうな顔をするシャロ。

「目覚めたのね」

「まったく、あたしに感謝しないさい！傷の手当をしたんだから」

そしてアイリーンちゃんとこころちゃんも声を掛けてくる。皆は？

「えっと…私達迷子なんです」

……警察が迷子？僕がこころちゃんに視線を向けると。

「うぐっ…」

あ、言葉詰まらせた。それよりレポート…出来ないな。持ち物…なし。今度デパート行くと、懐中電灯ぐらい買っておう。そし

て改めて話を聞くと。僕が崖に落ちるとシヤロも足を滑らせて崖から落ちて、ネロたち三人とは離ればなれ、こころちゃんは穴に落ちてこの洞窟に着いた。

「…そう」

本心…どうしようも無い。とりあえず…。

「外、火、焚く」

「なんでですか？」

「警察、へり、気がつく」

「いい考えね、」

そしてアイリーンちゃんは外に出て行くまあ夜はへりが飛んで無くても念のためだね。

「あんたのトイズを使えないの？」

「……やってみる」

先ほど試したが、頭がくらくらしめて止めたんだよな。そして僕は意識を集中する。その間にアイリーンちゃんは戻ってくる。

「何してるの？」

「今、カイトさんのトイズを試してるの」

「……！？、」ほっ！」

「「「！？」「」」

あ、血吐いちゃった。僕は口元をぬぐう。まさか此処まで今の状況がやばいとは…そしてシャロ達はおびえてる。

「だ、大丈夫ですか！？」

「き、救急車！」

「病院！？」

三人が暴れだした。大丈夫なんだけど？

「あの…大丈夫」

「血を吐いて大丈夫なわけありませんよ！？」

あ、そうですね。しかもシャロ…怖いから。ものすごい怖いから。そしてシャロは近づいて口元をぬぐってくれる。

「今はこれぐらいしか…」

「…ありがとう」

それより…

「こころちゃん…僕、トイズ、無理」

「そ、そうね…ごめんなさい」

あ、最後小さく謝った。そしてアイリーンちゃんの助言により明日から行動を開始することに。そして今は夜、こころちゃんとアイリンちゃん、シャロは寝ている。僕は見張り。熊が現れたら怖いから。今は焚き火をして星空を見ていた。

「……………今宵、満月」

星が綺麗だな…あ、流れ星。

「（皆が幸せでありますように）」

……………さてと…。

「…誰？」

「…あ、えつと…」

シャロだった。

「早く、寝る、体調、悪化」

「…でもカイトさんだって悪化しますよ」

「僕、いい。それより、シャロ…寝る」

「…なんでカイトさんは私…私達の心配ばかりで自分の心配をしないんですか!」

「…恩返し」

「っ…もう十分恩返しされました！もう…十分…」

「……」

「だから…もう…自分の心配をしてください」

そして焚き火の音だけが聞こえる。

「…分かった。でも…約束、無理」

「そう、ですか。カイトさんも早く寝てくださいね」

自分の心配か、所詮僕は記憶が無い。心配する人なんて居ない、ずっと一人…孤独。

「（…僕は昔、心配してくれる人がいたんだろうか？）」

父母、そして兄弟、友達、恋人。居たのか分からない。でも…今はシャロ達に助けてもらった恩返しが優先。

「…孤独…僕は、孤独」

そしてそんな咳きは夜空に消えていくのだった。

そして朝になり、僕達は洞窟から出発する。ちなみにシャロは起きなかつたのでおんぶしている。軽い。

「こつちよ」

アイリーンちゃんが教えてくれる方向に進む。それより…こつちよちゃん？疲れているように見えるけど？

「だ、大丈夫よ」

あ、疲れてる。仕方ない。

「シャロ…起きる」

「ふみゆ…はっ！か、カイトさん!？」

そして飛び起きるシャロ。なんで？

「あ、えっと…ありがとうございます」

「ん…こつちよちゃん」

「何よ」

そして僕は心ちゃんをおんぶする。だって疲れてそうだから。

「なっ…離しなさい！このIQ1300の明智小衣！こんな」

「黙る」

「はい…」

そして再び歩き始める。なんでシャロから悪意に満ちた視線を感じるんだろっ？こころちゃん軽く涙目ですよ？そして…歩いてみると…

「GOOOOOO」

熊に遭遇した。あ、終わったかな？そしてシャロが何かを言いかけたとき突然地面が割れ始める。地震…違う。でも今は逃げないと。そして僕はシャロとアイリーンを腰に抱えて走る。しかし爆発の力が強く、足場が崩れていく。まずいな…。そして足を滑らせてしまい、地面の割れ目に落ちる。

「きゃああああああああっ!？」

「うそおおおお!」

「こころちゃん!」

「させない!」

そして僕は意識を集中する。口の中から鉄の味がするが僕は気にせず意識を集中する。そして風景が鮮明に映し出されると…そこに力イト達四人の姿は確認できなかった。そして気がつく…警察の本部に到着していた。ネロ達やG4のメンツも近づいてくる。

「やったああああ!助かったよ!こころちゃん!アイリーンちゃん!」

「こころちゃん言うなあああ!」

そして僕はそんな嬉しそうな声を聞きながら…再び血を吐く。そして今度は意識を失うのだった。

「（ああ…シャロ達…に…大丈夫…夫…言わない…と）」

そして意識は完全に闇の中に落ちるのだった。

第五話 ヨコハマ大樹海（後書き）

感想、評価、アドバイス、待ってます！

第六話 怪盗アルセーヌ

「…?」

此処は…何処だ?空が暗い。体を起こし周りを見渡す、このアルコールの匂い、消毒液。来たことは無いけど病院かな?そして右腕には包帯。

「…(病院、か)」

シャ口達に心配掛けちゃったな。今は夜の何時だろう?僕は立ち上がり扉を開ける。通路は真っ暗。誰も居ない。夜中?仕方ないので部屋に戻ろうとしたところ暗闇の中気配を感じた。

「(誰だ?)」

そして僕は物陰に姿を隠し、気配を感じた方向を見ると日本刀を持った男がうろついていた。

「(あの男…アルセーヌの手下…。)」

何かを探しているようできよるきよるしている。そして男は壁際に手を置くといきなり壁が回転して男は姿を消す。

「(隠し扉…?)」

しかし状況を確認しようにも暗いため朝になるまで寝ることにした。

小鳥のさえずりと瞼の上からの明るい光で目を覚ます。朝か…そして部屋を見渡すと時計があり針は8時35分を刺していた。僕は病院のホールに行つて公衆電話をかける。

「（でもシャロ達の連絡方法知らないし…遠山さんに連絡しよう）」

そして博物館事件のとき渡された電話番号に電話をかける。ものの5秒で電話に出てくれた。

『もしもし〜?』

「僕、カイト」

『ん〜、目が覚めたんだ。それでどうしたの〜』

「シャロ、呼んで、お願い」

『了解なう〜』

そして電話が切れる。大丈夫だね。そして僕はシャロ達が来る間、昨日男が消えた壁際を調べること。すると薄っすら空気が流れていた。隠し通路…?僕は入院服からホームズ探偵学院の制服に着替える。今度私服も買わないと。そしてナースさんをお願いして懐中電灯を貸してもらつう。

「カイトさん!何動いてるんですか!」

「そつよ!病人は寝てなさい!」

「…?」

シャロ達を呼んだのになんでこころちゃん達G4も居るんだ？

「そ、それは…あなたが血を吐いたのは私の責任でもあるし」

「小衣さんはカイトさんの心配をしてたんですよ」

「ひ、平乃おおお！」

「あはは、まあお前を心配してたのは確かだぜ」

「次子まで!?!」

「心配しすぎてハゲるところだったなう」

「は、ハゲる!?! 咲!?!」

「そう…ありがとう」

「ふ、ふん！」

「」「」「私達を置いてけぼりにするな（しないでください）」「」「」

病院で騒ぐのは駄目だよ。とりあえず…

「付いてきて」

『?』

僕は昨日男が消えた壁まで行き、壁を少し強めに押す。すると壁開

いて新しい通路が見えた

「か、隠し扉!？」

「こゝ、こゝろちゃん！」

「こゝろろちゃん言うなああああ！」

「あの二人はほっといて…どうやって見つけたの？」

ネロ酷いな。

「普通」

「嘘」

…エリー酷い。普通に見つけたって言いたい。

「言いなさい」

「…はい」

コーデリア怖い。そして昨日の夜中通路に出たら男がこの壁を動かしていたことを説明する。

「…なるほどな〜こりや警察の仕事だぜ」

「そうですね…」

「怪しい」

G4もこころちゃん除いて話し合っている。僕はナースから借りた懐中電灯をつけて奥に入っていく。後ろからネロ、エリー、コーデリア、次子さん、平乃さん、遠山さんと続く。そして奥に入り込もうした時。

「待ってくださーい！」

「待ちなさいよおおー！」

「……………はあ……………」

みんな苦勞してる、と実感した時だった。

そして通路に入り分かったことは人工的に作られ、最近人が何人も通った形跡があることだ。

「一体此処は何なんでしょうね？」

「それより僕たちは何処に向かっているんだろっ？」

「怖いところだったら…どうしようっ！」

「…？」

僕は足を進めるのを止めると後ろが詰まる。ぐえ、痛い、とか色々聞こえる。

「行き成り止ままないでよ！」

「…畏」

「え…？」

僕は制服のポケットに入っていたハンカチを取り出して軽く投げってみるとハンカチはいきなり穴だらけになった。

『ええええええええ！？』

やはりか、実際壁際に小さな穴が開いており、そこから銃口を覗かせていた。こういうのは遠山さんかな？

「なう、赤外線探知機だね」

遠山さんはパソコンを持って話してくる。僕が赤外線探知機の線を見ていると…

「…下通る」

そう、下に横幅1メートル、縦幅60cmの赤外線の穴があった。そして10m先にはスイッチらしきものがあることからあれを押せば通れる。

「…背、低い、人」

『……………』

そして無言で一人を見る。こころちゃんである。

「い、嫌よー！」

「どづしても？」

「どづしてもよー！」

「…はあ、警察、駄目」

「なああああ！？」

「こころちゃんには失望しました」

シャロが続けて言う。

「G4のリーダーに向いてないんじゃないかね？」

次子さんも後に続く。そしてとどめは。

「所詮はガキだな」

ネロでした。

「そこまで言うならやっつけてやるわよー！」

「くくくく（よしー！）」「くくく」

そして四人は無言でアイコンタクト。そしてこころちゃんはしぶしぶ赤外線の入って行く。そして後2メートルの所でこころちゃんの髪の毛が赤外線に当たりこころちゃんの頭を掠る。

「~~~~~!?!」

「じじろちゃん!もうちよっとです!」

「じ、じじろちゃん言つなああああ!」

そしてじじろちゃんは無事穴を抜けスイッチを押し、赤外線が消えたことを確認する。

「ひっく…怖かったよ〜」

「お、よしよし」

あ、やっぱり怖かったらしく次子さんに慰められていた。

「ごめん」

「…絶対もうしない」

軽く元気になった。そして再び通路を進んでいく。そして今度は大きな崖が待っていた。ここ病院の地下だよな?

「ひえ〜、落ちたら洒落にならんね〜」

「僕も流石にこれはどうかと思うよ」

「エリー大丈夫?」

「う、うん」

そして崖の向こうには再び通路。なんかスイッチがありそうだけど…違和感がある。

「……」

僕は地面に落ちていた石を拾って崖の下に落としてみる。手ごたえが無い。おかしい。

「…あ」

なんで気がつかなかったんだ？これ自体幻術だったんだ。実際の通路は使われていた。だけど僕に見つかるのは予想外だった。しかしアルサー又はこれをチャンスと思ったんだ。僕をこいつらは試している。どうせ最初に入り口に入ったときから監視、更には暗いことを利用して幻術にかかっているのが分からないようにしたんだ。

「…（つまりこれは幻術）」

崖なんかもまやかし。気配を探れば後方に二人…後方から襲ってくる気が…だけと思いつ通りにはさせない。

「皆、飛ぶ」

『えっ？』

そして僕は崖から飛び降りる。

「（アルサーであれば…）」

そして僕は目を瞑り来るべき衝撃に備えるが、衝撃は来ず目を開けるとアルサー又と手下三人が立っていた。

「（やはり…か。）」

他の皆の姿は確認できるが、変な動きをしている。精神が幻術の中にいるからだ。あたりは暗いが相当広いな。

「よく見破りました。カイト」

「そう」

「しかし怖くなかったですか？崖から落ちる事は？」

「二回目、慣れ。あと、信じていた、お前を」

「私を？」

「そう、お前は、人、殺す、嫌い、だから、殺さない、思った」

「…まさか私の事を知ってそこまでするとは…ますます気に入りました」

それはよかったね。

「だけど…此処の場所を見られては…貴方を倒す以外方法はありませんね。」

倒して如何するかは知らないけどね？僕は身構える。

「貴方達！」

「はい！」

そして三人が突き進んでくる。最初は爆弾を持った男の子。

「（次郎に似ているな。）」

男の子は爆弾を投げってくるが僕は避ける。すると後ろからシルクハットを被った男がトランプを投げってくる。トランプをバック転して回避、今度は日本刀を持った男。

「（待っていたよ）」

僕は日本刀を持った男に向けて懐中電灯の光を浴びせる。怯んだところを接近、回転蹴りで吹き飛ばし日本刀を奪う。そして爆弾を投げってきた男の子に向かって走り出す。再び爆弾を投げってくるが、爆弾の爆風を避け続ける。そして男の子の懐に入り日本刀の柄で腹を殴り吹き飛ばす。

「ちっ」

トランプが飛んできて僕は日本刀で叩き落とす。シルクハットの男のトランプを回避していると日本刀の持ち主の男が立っていて目を閉じている。

「（トイズか！だけど）」

「人形になれ！」

「お前が」

僕は日本刀の刀身を鏡代わりに反射させ日本刀の持ち主を人形にする。そしてトランプの男もトランプが無くなり手を挙げる。

「此処までね…ラット」

「いっつ…はいよ」

そしてアルセーヌが呼ぶとラットと呼ばれた男の子はトイズを発動するとこの地下室の部屋の壁から爆発が起きる。そして地面の下には扉。

『はっ！』

「皆、早く」

そして幻術から開放されたシャロ達を呼んで僕達は地面の扉に入るのだった。

そして出てきたのは海。どうも扉の先は下水道に繋がっていて海に流れ着いたらしい。一キロ先には病院が見える。

「お、おぼれます〜！」

「落ち着けシャロ」

「!?!?!?!」

「エリー落ち着いて」

「がぼがつgぼつ!?!」

「小衣大丈夫か？」

「服がぬれてしまいましたね」

「…パソコン」

とりあえず皆無事みたいだね。そして次子さんが海岸まで泳いで行って救助を要請。難を逃れるのだった。あ、日本刀返してないや…まあいいか。

「あの通路を破壊することになるとはね」

「アルセー又様すいません、みすみす逃してしまい」

「つゝゝゝ、カイトの野郎手加減知ってるのかよ」

「くっ、日本刀を奪われるとは」

「ますます気に入りましたわ…カイト」

第六話 怪盗アルセーヌ（後書き）

感想、評価、アドバイスなどお待ちしております！

第七話 炎の中で…

「…ふ！」

あのアルサー又達との戦いから一週間、体の調子も戻り今は盗んだ…借りている日本刀で素振りをしていた。鞘は無いので布に巻いている。上段からの振り下ろし、横払い、剣と体は一体…確かによく言われるけど案外そうかもしれない。

「…ふう」

そして持つてきておいたタオルで汗を拭く。今は朝の5時、4時から素振りをしていた。一時間もたっていたのか。

「…食堂、開いてるかな？」

そして僕は学園の食堂に向かった。そういえば最近シャロ達が猫を拾った。名前はかまぼこ、シャロ曰く「足の毛が白く肉球がピンクのためかまぼこのように見えるから」らしい。

「（…：まあシャロが決めた名前だから突っ込まないで置いておこう）」

そして食堂に入る、しかし流石に早すぎたのか誰もいなかった。しかし料理人はいるらしくキッチンの方から野菜を切る音などが聞こえる。

「…すみません」

「どうかしましたか？」

そして出てきたのは大きな帽子を被ったコックさん。あれ？

「…？、一度、会った？」

「（ギクツ）い、いえ？初めてお会いしますが？」

「（気のせい？）すみません、食事、出来て、ます？」

「（ホツ）ええ、用意しますので少々お待ちを」

「わかりました」

そして僕は近くのテーブルに座り日本刀を立て掛ける。流石に生徒がない食堂は静かだな。そして料理人が食事を持ってきてくれる。

「お待たせしました（こ、この刀は私のっ！？）」

「すみません（なんか焦ってる？）」

そして今日の朝食はご飯、味噌汁、魚の塩焼き、と言った和食であった。

「いただきます」

そして食べる。うまい。そして食べ続け10分ほどで食べ終わってしまふ。

「いちそうさま、でした」

「食器は跡で片付けるので置いて結構です」

「ありがとうございます、美味しかったです」

「ありがとうございます」

そして食堂を出て今度は何処に行こうかと迷っていると先ほどまで噂をしていた、かまぼこが現れた。

「にゃ〜」

「…かまぼこ、どうした？」

「にゃ〜」

そしてかまぼこがジエスチャー。シャロの寝相が悪く、ベットから振り落とされた。ジエスチャー終了

「そう…一緒、居る？」

「にゃ〜！」

そして僕は近くにあったベンチに座りかまぼこ膝の上に乗る、軽くもないし重くも無い。そういえば今日は休日だったな。何をしよう？

「かまぼこ〜」

「カイト〜何処だ〜」

ん？ネロとシヤロ？そして僕はかまぼこを肩に乗せて声がしたほうに移動する。

「あ、かまぼこ！カイトさん！」

「何処に行つてたんだよ」

「…秘密、どうしたの？」

「ええとですね、ネロが…」

「前回、出かけようって…約束忘れたのか？」

「（ふるふる）」

覚えてるよ。でも今日なんだ…それより二人は？

「「用事」」

「…？」

なんで声が合わさってるんだろう。そして…なんで物陰からエリーとコーデリアが見ている？

「（くじ引きで行く人を決めただもん）」

「（あんまり大人数じゃ困るからね）」

「…？、行く」

そして僕とシャロ、ネロは街に出かけるのだった。日本刀は僕が裁縫して作ったゴルフバックの中。

「（作るの大変だった。）」

そして街。と言うかデパート、そして服屋さん。とりあえず僕の私服を買おうと言うことになった。

「…はあ」

でもシャロ達がこれがいいだの、あれがいいだの、言っていて一行に決まらない。

「ネロこれは〜」

「お、いいね！これとこれと」

値段確認しなくて良いのか？そしてシャロ達がレジでお会計すると…合計金額が表示された、丸が五つあるよ？

「「……………」」

固まってる。どうするんだろう？

「あんだ達何してるのよ」

そこにはG4のメンツ…いや平乃さんと次子さんがいない。咲さんとところろちゃんがいた。

「じゃ買うの？」

「そ、そうしたいのは山々なんですけど…」

「お金が…」

「ふ〜ん」

咲さん、なんで服と僕を見比べるんですか？そして僕は試着室に連れて行かれ服を渡される。

「着てみるなう〜」

「…ん」

そして着てみる。僕には分からないけど似合っているのか？そして試着室を出てみる…あれ？咲さん以外固まっている。

「似合うね」

「そうなの？」

服は分からないな。あ、遠くに見えるエリーとコーデリアも固まっていた。なんで？

「あ、えつと似合いますよ」

「そう、僕もそう思うよ」

「あ、え、に、似合ってるわよ」

「シャロ、ネロ、こころちゃんが感想を言う。なんで戸惑ってる？」

「見慣れてないからね」

「そういうこと。そしてお会計。お金はこころちゃんが貸してくれました。」

「ありがとうございます、必ず返す」

「ふ、ふん！その内でいいわ」

そして次に何処に行こうかと話し合っていると隣のビルから火事が起きる。あれかな？僕は不幸体質で行く先々で事件が起こるんだな？

「ネロ、どうしよう!?!?」

「僕に聞かないですよ!」

「くっ！消防隊は!」

「今連絡した」

「…（消防隊は間に合わない。行くしかない）」

僕はゴルフバックを咲さんに預け、テレポートをしようとするすると運悪くシャロが裾を掴んでしまった。

「っ、シャロ!」

「え？」

そしてシャロと一緒に火事現場の中心にテレポートしてしまう。

「ごほっ！ごほっ！」

「シャロ！っ！？」

そして火の手がもうもうと立ち込める。僕はシャロを背中に抱えてハンカチを渡し走る。そして適当に扉を開けると非難した人達が数十人居た。そして中年の男が前に出てくる。

「…何人、居ますか」

「丁度20人だ、お前達も非難してきたのか？」

「いえ、救助に、此処、火事、来ない？」

「ああ、此処は緊急用のシェルターだ。しかし空気巡回が壊れていて空気が薄いんだ」

「…20人も居れば直ぐ空気がなくなるか。」

「…5人ずつ、並んで、ください」

「？、何故だ？」

「時間が、無い、急ぐ」

「どうかした？」

「い、いえ！？ふ、不束者ですがお願いします！」

「？」

何か違う気がする。そして少しずつだけど煙も侵入きた。僕はシャ口を押して横にならせる。一瞬シャ口の頬が赤くなったのは気のせいだよ。そして僕も横になる。煙は上に上がるからね。地面ギリギリにいたほうがいいんだ。

「……」

「…あ、あの〜」

「？」

「私の事、どう思ってます？」

え？いきなりだね。

「好き、だよ（友達的な意味で）」

「！？／／／」

あ、言葉間違ったかな？大丈夫だよ。

「（それより救助隊遅すぎないか？あゝ携帯欲しい。）」

「…／／／」

シャロは黙ってる。結構天井に煙がたまっている。空気巡回が行われていないのは確かだね。

「…（そろそろ来てもいい頃かな？）」

「あ、あの！」

「？」

「カイトさん、私実は　「シャロ！カイト助けに着たわよ！」…」

「コーデリア」

扉を開けて入ってきたのはコーデリア、後ろにはネロとエリーの姿も確認できる。そして僕は立ち上がりシャロの手を引いて何とか脱出に成功する。そういえば…

「シャロ？何、言おう、してた？」

「い、いえ！なんでもありません！忘れてください！」

そして小走りに走ってこころちゃんに抱きついてた。

「あ、あの…シャロに何か言われましたか？」

「？、特に」

「そ、そうですか…」

変なエリィ。そして僕とシャロは検査の為病院に連れて行かれるの
だった。病院に行くこと多いね。

第七話 炎の中で…（後書き）

…コーデリア、エリーの会話が無かった。次回だな。うん。出来ればだけど。

感想、評価、アドバイス、待ってます。

第八話 新たなる敵（前書き）

短いです。すいません。

第八話 新たなる敵

「…?」

「カイトさん！聞いていますか！」

あれ？なんでシャロが怒ってるの、此処 観覧車の中？そして観覧車の外には夜間の景色。

「ん、聞いている」

「えっと…それで…私は、その…カイトさんの事が」

え？今なんて言ったの？そして意識が徐々に遠ざかっていく。シャロ…

「シャロ！」

「は、はい！」

そして目を開けるとシャロ達4人の姿が確認できた。あたりを確認すると…此処はホームズ探偵学院のシャロ達の部屋か、かまぼこがベットで寝ている。僕はイスに座って寝ていた。しかし…夢か…

「どづしたのさ、シャロの名前なんか叫んで」

「夢」

「どんな夢？」

「…夜、観覧車、二人、シャロが、何か、言いそう、だった」

「夜？観覧車…？二人？」

コーデリアがトリップした。ネロが頬をつねって復活させた。しかし夢の中のシャロ何が言いたかったんだ？

「シャロ」

「は、はい！？」

「僕、言いたい事、ある？」

「え…えくと…んと…特には」

そうか…流石に現実世界と夢とは違うからね。

「そう…今、何時？」

「朝の8時です」

エリー。最近普通に接してくれるようになった。そういえば前回の火事事件は放火だったらしく犯人は捕まっていない。死者が居ないのは幸いだった。

「…今日、如何する？」

今日も学校は休み。流石に昨日はレポートで体力を消費したな。まだ体が重い。寝てた方がいいけどシャロ達に心配かけたくない。

「今日は特に予定がありません」

「ん、図書館、行く」

「？、図書館？」

「そう、勉強」

そして僕は部屋を出て図書館に向かう。体が重いけど活動に支障はない。そして図書館への道のり歩いていると誰かにぶつかる。そしてぶつかった人物は生徒会長。

「…すみません」

僕この人苦手。なんていうか心を読まれる感じがする。そして僕は再び歩こうとしたが…

「待ちなさい」

「…なんです？」

生徒会長に呼び止められた。なんだろう？

「貴方はまだミルキイホームズと活動しているのですか？」

「はい」

「生徒会長として男女が同じ部屋に住むことは許しません」

もっともなことだね。でもイスで寝ているだけなんだが。そして僕は生徒会長の話を聞き終わると図書館に行くため歩く。

「…」

「…」

そして生徒会長が声を掛けてくることは無かった。そして図書館に着くと同時に歴史、文字、等を覚えていく。

「？」

そして一冊の本を見つけるシャーロック・ホームズ？ シャロと同じ名前。その人物は昔探偵として大活躍した人。そしてその銅像はホームズ探偵学院に立てられている。もしかしてシャロは… シャーロック・ホームズの

「……子孫？」

でもなんで苗字が違うんだろう？ そんな疑問を頭に残しながら図書館を出てシャロ達の元に向かった。そして途中で違和感に気がつく。

「…？、静か過ぎる」

まだお昼前なのに誰の声も聞こえない。休日だから生徒が少ない理由もあるがおかしすぎる。そしてシャロ達の元に行こうとしたとき一人の人物が現れる。そいつは黒いフードを深くかぶり。顔は見え

ない。

「誰？」

「くっくっ、誰だろうな」

男。僕は無視して進もうとしたが男は懐から黒い物体を取り出す。それは黒光りする拳銃だった。

「っ」

「此処から先は生かせないぜ。悪いがお前に死んでもらう」

「お前…誰」

「俺か？俺はお前だよ」

そしてフードを取ると…僕と同じ顔の男が居た。

「！？、何で？」

「さあな、じゃあ 死んでくれや」

「っ！」

僕は窓ガラスを破り三階から地面に落ちる。右腕を痛めたが気にせず走る。そして後ろから三発乾いた音が聞こえたと思えば右肩に鋭い痛みが走る。

「（撃たれた！？けどまだ大丈夫）」

そして物陰に隠れて僕は職員室に繋がる窓を壊し。職員室に入ると電話を借りる。もちろん電話するのは警察。

『もしもし〜』

「…咲さん、急いで、学校、来て、ください」

『何かあったの?』

「そう（パンツ）っ！」

そして乾いた音と共に電話が破壊される。そして僕は再び職員室の窓ガラスを破り逃亡を図る。右肩の痛みで視界が…。

「（このまま逃げ続けては…間に合わなくなる）」

そして今度は体育館に逃げ込む。元々カーテンが閉めてある体育館は暗く、逃げるには丁度いい。そして僕は消火器を見つける。そして相手に投げつける。消火器は男には当たらなかったが。栓を緩めておいたので白い粉が男の姿を見えなくする。そして僕は再び逃げる。

「ちっ、逃げるんじゃない！」

そして後ろから乾いた音と共にガラスが割れる。そして僕は手短にあった教室に入り身を隠す。此処は…そして机の陰に隠れる。

「…ちっ、面倒だな」

ピントッ、と言う音と共に手榴弾が転がってきた。

「!?!?」

そして僕は教室の窓から身を投げ出す。そして後方では爆音と共に爆風が起こり僕を吹き飛ばす。

「まさか手榴弾を使うとは」

そして地面に着地。再び走り出そうとしたら隣に手榴弾が落とされていた。僕は即座に回避するが吹き飛ばされ校舎のコンクリートに頭をぶつけてしまう。

「っ!?!?」

頭がくらくらするが、僕は走り出すが拳銃の音と共に背中と足に激痛が走る。

「ふ…これで最後だな」

そして倒れている僕の頭に拳銃を突きつけてくる。何か…無いのか。そして目に付いたのはコンクリートのかけら。

そして僕はコンクリートのかげらを拳銃の銃口にこっそりとテレポートさせて銃口を塞ぐ。

「あばよー!」

そして男が引き金を引いた瞬間。拳銃が暴発した。そして男の右腕は動かなくなっただけらしい。

「てめえ…ゆるされねえな」

そして懐から再び手榴弾を取り出してくる。今度こそ駄目か。そして諦めかけたが遠くからサイレンの音になる。

「ちっ！サツか…今日の所は引いておく。じゃあな！」

そして僕と同じ顔の男は消えた。そう文字通り消えた。まるでレポートのように。そして遠くからG4の皆とシャロ達が駆けつけてくる。

「カイトさん！何があったんです！」

「シャロ！それより治療！救急車！」

「あ、ああ!？」

「エリー！私と一緒に先生を呼んできましょう！」

「ちよっと！何があったのよ！」

「平乃！パトカーから救急箱を！」

「はい！咲さん！救急車に連絡を！」

「もうしてある」

あれ…視界がかすむ。しかも体が動かなくなってきた…シャロ不在しているの？大丈夫だよ…僕は死なない。君達を残しては死なない。

「…まだ…一緒に…いたい…か、ら」

そんな事を考えながら意識を失ったのだった。

第八話 新たなる敵（後書き）

誤字、アドバイス、感想、よろしくお願ひします。次回投稿遅くなるかも。

第九話 約束（前書き）

短い！？すみません、なんか内容おかしいな？
オリジナルです

第九話 約束

「…っ!？」

此処は…病院？そして体には包帯が多数巻かれている。そうだ、確か男の拳銃で撃たれて…そして息も苦しい。なんだったんだろう？

「…また、病院、来たな」

どれだけお世話になっているんだろう。そして個室に備え付けの時計を見ると午後7時を示していた。シャロ達に会いたい。

「…テレポート」

そして病院から抜け出しテレポートする、テレポート先はシャロ達の部屋。そしてテレポートが完了、目の前に見えたのは。

「……」

「あ、えっと…ですね!」

「そ、そう！遊び！遊びだよ!」

次郎が椅子に縛り付けられてシャロ達に殴られていた。そして再びテレポート。病院に戻ってくる。

「…忘れる」

うん。きっと正しい選択。そして僕は病院のベットで横になり早め

に眠るのだった。

「？」

騒がしいので軽く目を開けてみれば空は夜空。そして僕の横にはアルセーヌが佇んでいた。

「（なんで）」

「…カイト、貴方が仲間になってくれれば…どれほど嬉しいことか」

そして僕の髪の毛を触りなでる。アルセーヌ…誰かに似ている。生徒会長？

「…しかし敵となるならば仕方ありませんね…容赦はしませんよ」

そしてマントを翻すとその姿は消えていた。まるで幻術の様に。僕は目を少し開けあたりを見渡す。しかし誰も居ない。

「（…どうやって？）」

そんな事を考えたがトイズを使って姿を消したのだろうと結論して再び眠りに落ちるのだった。

「…?」

そして目を開けるとエリーが居た。今の時間は9時、学校が始まってると思っただけだ。

「あ、大丈夫です。許可は取りました」

「そう…」

「それと…りんご食べます?」

ベットの横には果物が置かれていた。誰が置いていったんだろう。

「生徒会長からお見舞いの品と言って渡されました」

会長が…やはりアルサーヌの正体は生徒会長?そしてエリーが器用にフルーツナイフでりんごの皮を切る。そしてウサギの形に切る、うまい。そして一口食べる。

「美味しい」

「ふふっ」

そしてどんどんエリーが皮をむいていく。そして僕は食べていく。そして食べ終わるとエリーが話しかけてくる。

「昨日…何があったんですか?」

「…襲われた」

「誰にです？」

「…わかんない、でも、おなじ、顔」

「え？」

そう昨日襲ってきたのは僕と同じ顔だった。紛れも無く同じ。そして僕を殺す気だった。まるで僕の過去を知っているような…。

「僕、何者？」

「…」

エリーは答えない。いや、答えなんて求めていない。あの男は…何者？そして考えすぎたのか頭に少し頭痛が走る。

「エリー、少し、寝る」

「分かりました」

そして僕はベットに横になり、仮眠をとることにした。そして直に僕の意識はやみに落ちた。

そして目を開けるとシャロが横に居た。それは絶望したような顔。まるで何かを失ったような顔だった。

「…シャロ？」

「っ…カイト、さん？」

そして僕が起きると泣き始める。

「心配、しました。カイトさん、が、死んじゃうと、思って」

「じめん」

僕はバカだ。シャロ達に心配をかけたくないのにかけてしまう。僕は…バカだ。

「…カイトさん…もう…心配、かけないでください」

「…それは」

うん、とは言えない。シャロ達を守るためには心配をかけてしまう。だけどシャロは心配する。僕は…如何すればいい？

「…分からない」

「っ…」

「…ごめん、本当、ごめん、分からない。ごめん、ごめん」

分からないんだ。僕はどう行動すればいいか。分からない。理解不能。どちらの行動を選択する。シャロを守る。シャロに心配かけない。どっち。どね。

「分からない分からない」

「カイトさん！」

そしてシャロが抱きつき思考が正常に戻り始める。

「わかりました…カイトさんが私を守るように、私達もカイトさんを守ります！」

ああ…この子は、正直だ。何もかもがまぶしすぎる。この子を失ってはならない。絶対に。

「うん…ありがとう」

「い、いえ」

「皆…」

「あ、さっきロビーに行っただんですけど…遅いですね」

そしてシャロが個室の扉を開けるとネロ達三人がなだれ込んでくる。何してるの？

「だって、僕達が帰ってきたらシャロが抱きついてるんだもん」

「えー！」

「気まずい」

「うー!」

「シャロ!何をしてたのか言いなさい」

「あ、え…!」

「慰めて、くれた」

「「「え!?!」」」

「シャロが!」

「慰めて!」

「くれた!?!」

「何でそんなに驚いているんですか!?!」

「「「だつてねえ」」」

「なんなんですかあ!?!」

「ふふっ」

楽しい。この四人、ミルキイホームズと一緒に居るのが楽しい。この絆、風景を見守ろう。いつまでも。永遠に。

第九話 約束（後書き）

短いですね。すみません。次回はストーリーどおりに行きます。

第十話 変装（前書き）

… やっちまった！何故かアニメ4話かな？それを飛ばして書いてしまった。そして今回も短い。もう死にたい。誰か殺して。お願い。

第十話 変装

「ふう…」

謎の男に襲われてから一ヶ月。僕は無事学校に戻ってこれた。まあ単位が危ないけど生徒会長が何とかしてくれた。生徒会長は良く分らないな。敵しそうで優しいのか？そして今は外でかまぼこと共にほのぼのタイム中。最近ぼかぼか陽気が続いてシャロ達も授業に身が入っていない。そういえばかまぼこが行方不明になる事件が発生したけど無事だったようだ。

「…それより、シャロ達、遅い」

何故かシャロ達が来ない。いつもならそろそろ集合するはずなんだけど…まあ寝ているのだろう。休日からね。僕は立ち上がりかまぼこを肩に乗せて歩き出すのだった。人と猫一人一匹で。

そして街に到着。そう、せっかくの休日なので街に行くことにしたのだ。それより何故シャロがテレビに写っているんだ？え？王女？いやいや、そっくりすぎだろ。そしてテレビを見ていると後ろに気配を感じる。そして後ろを振り向くと…

「シャロ…？」

「え、え〜と…」

「…あ！」

「あ、あわわ！」

そうだ、この人シャロじゃない！王女様だ！テレビで脱走（？）したとは聞いていたけどこんなところに居たのか！しかし近くで見ると本当にそっくりだな。

「あ、あのそんなに見られても…／＼／」

「ごめん」

つい凝視してしまった。それより王女様がこんなところに居て良いのか？あ、名前紹介しないと。

「僕、名前、カイト」

「え、あ、私はクラリスと申します」

…ごめんシャロに似すぎて軽く笑いそう。おっと…それよりも、

「此处、居て、良いの？」

「え」と…駄目です。」

「…えええ」

自分で分かっているながらそれを言うのか？

「だから…匿ってください！まだ結婚とかしたくないんです！」

根本的な事を否定しました。でもなあ。どうやって匿えば…？僕が

悩んでいるとかまぼこが鳴く。そして後ろにはシャロ達の姿。

「カイトさん！見つけましたよ！」

「何処に行つてたんだよ！ん…シャ、シャロが二人居る！？」

「ええええええ！？」

「ど、どつちが偽者！？」

「「「「つちです！」「」」」」

息びったりだね。あ、そうだ。

「いいこと…思いついた」

「「「え？」「」」」

またまた息びったり。そして僕は説明し始めるのだった。

「…カイトさん」

「何？」

「大丈夫なんですかあ！？」

そう、シャロは今王女の格好をしている。

「聞いてますかぁ!」

「…」

「眼をそらさないでください!」

「大丈夫…多分」

「多分って言いましたよね!」

「うん」

「はつきり言っちゃいました!」

シャロ面白い。そして現在王女様のお部屋。僕が考えた策?なのかわからないけど、シャロとクラリスが入れ替わる。入れ替わっている間、シャロが結婚相手をいじめる 嫌われる 破局
うん、無理かも。

「でもカイトさんも一緒だからいいですけど…」

「僕、途中、帰る、よ?」

「…ってなんですかぁ!」

「だって、不審者、僕、王女の部屋、居たら」

「そ、そうですね…何かしてくださいよ!」

「それ…僕に、言うっ？」

今はシャロが王女様なんだから王女様が命令すればいいと思うけど？

「そうですね！」

思考読まれた。

そしてシャロは側近に許可をもらい僕を部屋に招き入れた。無理やり入れたけど。クラリスは多分今頃ネロ達と楽しんでいるであろう。シャロはお部屋を模索中。いいのかな？

「あ、下着発見！」

「仕舞う」

「あ、絵本発見」

「仕舞う」

「あ、かまぼこ発見」

「確保」

「あ、ごみ発見」

「捨てる」

「あ、こころちゃん発見」

「逃げる!？」

そしてテレポルトで転送。無事難を逃れるのだった。

「今こころちゃん言った奴だれよおおおお!？」

「うわぁ、すげえ地獄耳」

「怖いですね」

「なう」

で、時は変わって夜。僕も姿を潜めながら寝ようとしていた。あの後テレポルトで帰ってきたらこころちゃんが居てびっくりした。もちろん逃げたけど。その後シャロは事情を説明してこころちゃんを説得。難を得た。危なかつたね。そして今はシャロがベットで寝ている。僕は近くの椅子に腰掛けてシャロが寝るまでおきている。寂しいんだった。

「…カイトさん」

「何？」

「…一緒に寝ませんか？」

「…え？」

「その…落ち着かなくて」

「…ん」

そして僕はベットに入るものの一定の距離を置く。だって近すぎると危ないからね、一応シャロも女の子です。

「…私如何したらいいんでしょうか？」

「…」

「トイズを失って、もう…何もとりえが無い私たちは如何すれば…」

「…大丈夫」

「え？」

「シャロ達、自分が、出来ること、すれば、良い。」

「あ…」

「だから…僕、助かった」

そう、もしシャロ達が僕達を見つけてくれなければ僕は今の姿は無かっただろう。全てシャロ達のおかげ。

「だから…安心、する」

「…そうですね」

「…そろそろ、寝る」

「はい、カイトさん…おやすみなさい」

「おやすみ…シャロ」

そして騒がしい一日は終わりを告げた。また明日を迎えるために。

第十話 変装（後書き）

さあ！僕に罵声を浴びせろ！もう死にたいんだ！こんな駄作見ている人に感謝、アンド謝罪

第十一話 王女（シャロ）の生活一日目（前書き）

本当に申し訳ない。諸事情により遅れてしまいました。そして地震
に關してもこちらは無事でしたが皆様はどうだったでしょうか？無
事を祈っています。

第十一話 王女（シャロ）の生活一日目

朝、起きて目を開けるとシャロの顔が近くにあり驚いた。そういえば一緒に寝たんだった。でも昨日までこんな近くなかったんだけど…？

「…」

僕はそつと布団を出てシャロに毛布を掛けると椅子に座って目を閉じた。もう少しで起床時間だ。王女の執事も来てしまう。しかし…

「（不覚にも驚いてしまったな…シャロの寝顔に）」

そんな事を考えながら。そんな朝の光景から一日は始まった。朝になつたので置手紙を置いて王女の部屋の天井裏に身を隠す。

「（…僕は忍者か？）」

天井裏から見守っているが、一向に起きる気配を見せないシャロ。そして執事が入ってきてきてシャロを起こし食事に連れて行ってしまった。

「行く」

付いて行くように天井裏を移動する。そしてシャロが食事のある部屋に付くと同時に普通に食べ始めた。

「（あれ？普通に食べた）」

いつもならもつとガツガツ行くのに。寝ぼけてるな。あ、こころちやん居るじゃないか。話を聞いてみようか。

「（咲！警備は大丈夫でしょうね）」

「（なう）、監視カメラ、警報システム共々大丈夫）」

「（小衣、一部警報システムに反応があったぞ）」

「（なんですつてえ〜！何処の警備システムよ！）」

「（えつと…天井裏です）」

……………やばい。ばれた。そして仕方ないのでテレポートして何処かに飛ぶ。そして出てきたのは王女がいる屋敷の屋根。下では警察+G4が騒いでいる。これはミスったな。

「（シヤロは部屋かな？行くか）」

王女の部屋にテレポートする。あと二回か。そして部屋に行くとシヤロがおどおどしていた。そして僕の姿を見つけた瞬間笑顔になる。

「あつ、カイトさん！無事だったんですね」

「まあ…」

部屋の扉から執事の声が聞こえてくる。やばい！？テレポートをこれ以上使つと後々困る！なんとか隠れないと！でも隠れられる場所無いんだよね。

「こつちです！」

シャロが僕を突き飛ばして王女のベットの中に入れるとベッドに
いているカーテンを閉めてシャロもベットに入ってくる。

「こつしていれば姿は確認できません！」

「そう、でも、顔、近い」

「四の五の言ってられません！覚悟をしてください！」

あ、はい。そいして執事が部屋に入ってくる。

「どうかされたのですか？ベッドに入って」

「不審者が居るらしいので怖くて」

シャロうまい。早く執事を帰らせてくれ

「そうですか、安心を王女に指一本触れさせませんので、では」

部屋を出て行く執事。あぶなかった。そんなこんなで危険な一日が
開始された。

第十一話 王女(シャロ)の生活一日目(後書き)

短いですね。すみません、そして久々に書いたものでやばあい。
これから更新遅いと思えますが徐々に書いていこうと思えますので
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7438p/>

探偵オペラ ミルキィホームズ 記憶を失った少年

2011年4月16日06時27分発行